

「司祭」

主任司祭 晴佐久昌英

高円寺教会前主任司祭、岩崎尚神父が亡くなった。61歳だった。

高円寺から転任して、まだ三年もたっていない。苦楽を共にした人も多いだろう。五井教会の信者たちにとっては、現主任司祭である。喪失感もひとしおだと思う。

来ては去り、やがて死んでいく司祭たち。小教区の信者にとって、司祭とは何なのだろう。

信者たちにとって、よくも悪しくも司祭という存在は大きい。当然、前の神父はああだ、今度の神父はこうだと比較もするし、俺は嫌いだ、あたしは好きよと品評もする。しかしたまには、司祭の気持ちというものも想像してみてほしい。

司教の命を受け、なじみのない土地の、知っている人もいない教会へ赴任していくときの緊張感。長い歴史を共有し、すでに親しく交わっている共同体へ加わっていくときの疎外感。大勢の信者のそれぞれの思いにうまく応えられないときの無力感。時には批判され攻撃され、去っていく信者さえいるときの徒労感。日曜日の夕方、信者たちが家路についたあと、一人残る司祭館でインスタント味噌汁をすするときの孤独感。そうしてある日、司教から電話が来る。「大変急だが、事情があつて異動が決まった。次はどこそこへ行ってもらいたい」…。

司祭は、寂しい。しかし、だからこそ意味がある。目指すはキリストの家族なのであって、司祭の家族ではない。ある意味では、司祭が寂しい思いをすればするほど、キリストの家族が輝きを増すのではないか。ちょうどキリストが最後に究極の孤独を引き受けたからこそ、キリストの教会が生まれたように。わたしたちはいつも、誰かの尊い孤独に支えられて生きている。

岩崎神父は体も声も大きく、頑固一徹なところがあり、一見強い人に見えたかもしれない。断言できるが、寂しがり屋だった。そしてその孤独を捧げていた。求道の人だったと思う。

三年前、彼が高円寺教会を去るときに、「荒れ野へ向かう」と言ったのを覚えているだろうか。荒れ野とは、寂しいところである。自分の居場所の持てないところである。司祭として死ぬ覚悟のある、美しい言葉だと思う。